

中世の主要城館

中世、相馬氏の一族や家臣たちは領内の館に住み、相馬氏に従いながら近隣の村を支配した。

南北朝時代から戦国時代にかけての城郭は、丘陵・山地を利用した山城であり、平地の屋敷には罌や濠をめぐるように防備・戦闘を考慮した構造をしている。

現在の原町市にあった城館は、太田別所館（原町市太田）・牛越館（原町市牛越）・泉の館（原町市泉）・明神の館（原町市大甕）・江井の館（原町市江井）などがある。



▲ 中世の主要城館図

◀ 太田別所館跡（現在の太田神社）

牛越城

原町市牛越字城下・館下にあった城館。15世紀中頃は牛越定綱の居城だったといわれる。その定綱が文安2年（1445）、当時の相馬氏当主相馬高胤に対し謀反を起こしたため、高胤によって滅ばされてからは城番人が置かれていた。

慶長2年（1597）相馬氏第16代当主の義胤は、この地に新たに城を築き居城と定め、小高城から移り住んだ。しかし牛越城移住後、親族の死や慶長7年（1602）に領地没収となるなど、不幸な出来事が続いたため、牛越城は不吉の城とされ、慶長8年（1603）には再び小高城へ居住を移すこととなった。城の東南には最近まで町場・鉄砲町などの地名があり、義胤はこの牛越に城下町の形成を目指していたことが想定される。

現在も本丸・二の丸・三の丸・空堀・帯曲輪・腰曲輪・妙見館などの遺構を残しており、当時の牛越城の様子を垣間見ることができる。



牛越城模型



牛越城の図